様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　3　月　31　日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８　～　２０１０
課題番号：２０５２０３５８
研究課題名（和文）　ダイクシスから引用へ：認知語用論からのアプローチ

研究課題名（英文）　From Deixis to Quote: A Cognitive Pragmatic Approach

研究代表者
内田　聖二（UCHIDA SEIJI）
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：００１０８４１６

研究成果の概要（和文）：
ダイクシス現象が具現される「引用」を認知語用論の観点から分析することでより広い言語事象がメタ表示能力と関連することを明らかにし、一般に引用と考えられてこなかった言語現象もその一環とみなす可能性を指摘できた。たとえば、「くれる/もらう/あげる」などの授与動詞や「たい/たがっている」などの願望動詞の振る舞いや獲得プロセスにもメタ表示能力がかかわることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
By analyzing in terms of cognitive pragmatics ‘reported speech,’ where deictic phenomena are typically realized, I explained that broader speech events and what has not been regarded as ‘reported speech’ can be involved in metarepresentation. It has also turned out that *kureru/morau/ageru and tai/tagatteiru* in Japanese are closely related to metarepresentational ability.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：ダイクシス、引用、メタ表示能力、認知語用論

１．研究開始当初の背景

平成１７年度から１９年度にかけての「メタ表示能力と言語獲得に関する認知語用論的研究」（研究代表者：内田聖二）において明らかになったおもな点に次のようなことがあった。

(1) ダイクシス現象とメタ表示能力は密接な関係がある。
(2) 引用現象もメタ表示という視点からとらえ直すことによって新しい切り口を拓き、統一的な説明が可能である。
(3) 言語現象にメタ表示能力がかかわることは広く知られているが、「くれる/もらう/あげる」などの授与動詞もその観点からとらえることができ、子どもの言語獲得と切り離すことができない。

以上のことが背景にあり、今回の応募につながった。

２．研究の目的

上記で挙げた１９年度までの科研の成果を次のような形で発展させたいと考えた。
(1) ダイクシス現象とメタ表示能力を「引用」という観点からみることでより広い言語現象がメタ表示能力と関連することを明らかにする。
(2) 引用もメタ表示現象ととらえると、今までは引用と考えられてこなかった言語現象もその一環とみなすことができる可能性がある。
(3) 「くれる/もらう/あげる」などの授与動詞や「たい/たがっている」などの願望動詞がどのように獲得されるのか、また、引用現象が子どもの言語獲得のプロセスにどのように現れるのか探求する。
(4) 研究の途上で必然的に出てくる日英語の新しい視点からの対照研究の端緒となりうる。

３．研究の方法

本研究の柱として「理論」、「実験による検証」、「実証的データ」の３つを立てた。
(1) 理論

理論的な側面としては本研究が拠って立つ関連性理論を精査することから始めた。基本的な概念のうち、特に、関連性の原理、metarepresentation、高次表意、手続き的意味などを Sperber and Wilson（1986/1995)を確認しながら、Sperber、Wilson、Carston、Blakemore などの著作にあたった。また、そのほかの関連論文を読むとともにダイクシス、言語獲得にかかわる資料も参照した。また、関連領域の書籍も購入し備品の不備を補った。

一方、国内外の各種学会に出席し、最新の知見や情報に接するよう努めるとともに、下で述べるように、2 件の学会発表で本研究の方向性を確認した。
(2) 実験による検証

「くれる/もらう/あげる」「たい/たがっている」の異同、引用にかかわる言語事象、高次表意の日英語における具現のされ方の違い、などをターゲットとし、附属小学校（1 年生から 6 年生まで）と奈良女子大学で調査・実験を実施し、その一部を下の研究成果の書籍②に反映させた。
(3) 実証的データ

わずかではあるが、上記の調査、実験で得られたものをデータとして保存した。また、院生の協力をえて、ペーパーバックの現代小説に現れたダイクシス、引用現象など、過去において収集した英語表現を記録媒体に保存した。日本語に関しては、電話を録音した CALLHOMEJapanese から伝達動詞「言う」を中心とする使用例を抽出し、アルバイトを使って収集し、保存した。いずれも今後の研究に利用可能な形に整いつつある。

４．研究成果
(1) 口頭発表

理論面では、関連性理論の創始者のひとり、D. Wilsonを招いて開催されたワ

ークショップ（於神奈川大学）(2008年12月17日）に招待され、’Pragmatic Intrusion into Syntax?’を発表した。これは従来、語用論による意味論への「侵入」はよく言及されているが、日本語の視点からみると、よりradicalな統語論への「侵入」がみられることを指摘したものである。関連性理論の根幹に理論的にかかわるものであるが、Wilsonからも賛同を受けた。また、12月20日に行われた日本語用論学会全国大会（松山大学）では、’Issues in Pragmatic Impairment：Cognitive Pragmatic Approaches’というタイトルでワークショップを企画し、3人の発表者を慫慂するとともにWilsonをコメンテーターに迎え、司会を務めた。そこでは、認知語用論と自閉症、識字難読症、認知症という病理との関係に焦点を当て、認知語用論の応用可能性を論じた。また、日本における主だった関連性理論研究者を集めて、KRG談話会を2010年3月9日奈良女子大学で開催し、6つの研究発表の場を提供した。その際、「語用論能力とL2教育－関連性理論からの視点」と題して口頭発表を行った。さらに、理論的側面の成果としては、2009年10月スペインで開催された手続き的意味にかかわる国際学会に参加したことがある。そこで、D. WilsonやD. Blakemoreをはじめ関連性理論に興味をもつ精鋭の研究者と意見を交換し、本研究の方向性の正しさを確認することができた。

(2)印刷物としての業績

2008 年度の主たる成果は英語のnative speakers の言語獲得をわかりやすく概説した W. O’Grady, *How Children Learn Language* の翻訳である（邦題『子どもとことばの出会い－言語獲得入門－』研究社）。本研究の柱を「理論」、「実験による検証」、「実証的データ」としたが、原著は英語の native speakers にかかわる「実験による検証」と「実証的データ」を豊富に含んでいることで意義を有している。

2010年12月には上記KRG談話会での口頭発表を加筆したものを英語教育学大系第８巻『英語研究と英語教育』（岡田伸夫、南出康世、梅咲敦子（編））に第6章「関連性理論」として出版した。これは、L2教育を関連性理論からみた論考で、関連性理論を英語教育に応用する際の問題点とサジェスチョンを述べたものである。

また、2011年3月には、上記、神奈川大学におけるワークショップでの口頭発表の一部を骨子とする、「引用とモダリティーメタ表象の視点から」を武内道子、佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ』の1章として出版した。本研究テーマと直接かかわる引用をメタ表象と関連づけて英語と日本語の両方から論じたものである。

さらに、実用面への貢献としては、長年編集作業に携わっていた『英語談話表現辞典』（三省堂）を2009年7月に出版した。会話に頻出する表現を語用論的観点から詳しく説明した世界でもはじめての辞典で、好意的な書評を得ている。

なお、二期にわたる科研の集大成として、現在『語用論の射程』というタイトルの単著が印刷中で近々刊行予定である。これは理論的中核をなす関連性理論の概要からはじめ、語彙の語用論的情報、ダイクシス、引用、テクスト現象、などを語用論の守備範囲として論じたものである。

ついでながら、以上の成果を踏まえ、平成23年度からの科研（基盤研究C）に「新しい日英語比較対照研究―認知語用論の視点か

ら―」のタイトルで申請したところ交付内定通知があった。これも本科研の大きな成果のひとつである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）
① 内田聖二「語用論的能力と L2 教育－関連性理論からの視点」KRG 談話会（2010 年 3 月 9 日）奈良女子大学
② Seiji Uchida, ‘Pragmatic Intrusion into Syntax?’ ワークショップ「モダリティ：認知語用論の視点から」神奈川大学対照言語学研究会（2008年12月17日）神奈川大学

〔図書〕（計４件）
① 武内道子・佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ』ひつじ書房（第２章引用とモダリティ(pp. 21-42）担当）（xiv + 259）2011 年
② 岡田伸夫・南出康世・梅咲敦子（編）『英語研究と英語教育（英語教育学体系第８巻)』大修館書店（第 6 章関連性理論(pp. 97-115) 担当）（xiv + 278）2010 年
③ 内田聖二（編）『英語談話表現辞典』三省堂（696） 2009 年
④ 内田聖二（監訳）『子どもとことばの出会い：言語獲得入門』研究社（x+288）2008年

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
内田　聖二　（UCHIDA SEIJI）
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：00108416